

学 位 論 文

アリス・ウォーカーの長編小説における暴力への対応  
(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号:D132611

氏名:光森 幸子

## アリス・ウォーカーの長編小説における暴力への対応

アリス・ウォーカー (Alice Walker 1944-) は、アフリカ系アメリカ人の尊厳や歴史を奪ってきた白人支配社会に対し、ペンによる抵抗を続けてきた伝統的な黒人文学の遺産をしっかりと継承しつつ、彼女が提唱した「ウーマニスト」の視点からいち早くポストモダンの作風を取り入れ、人種や性、文化や国の違いを超える人々の大きな連帯を目指した作品を発表してきた、現代アメリカ黒人女性作家である。しかし、特に彼女の初期の作品においては黒人家庭内での激しい暴力描写が目を引きのために、多くの批評家はウォーカーの意図をリアリズム的に解釈し、黒人登場人物を白人至上主義の犠牲者や分離主義者と見なすなど、二項対立的視点から考察してきた。しかも、人種の多様性や解釈の多義性に寛容なウォーカーのポストモダンの姿勢に注目する作家でさえ、そこにウォーカーが積極的に参加した 1960 年代の公民権運動の経験とその「非暴力」の精神が現れていることは見落としがちである。しかしウォーカーは、「ウーマニスト」という、二項対立的価値観を超える独自の視点から公民権運動の「非暴力思想」をさらに深め、作品の年代が下るごとに、それを未来志向の思想へと発展させている。本論文の目的は、そうした新たな視点からウォーカーの文学的挑戦を明らかにすることにある。そのために、ウォーカーの長編小説全 6 編を取り上げ、そこに描かれた様々な暴力に対する登場人物の反応について、テキスト間のつながりや発展性に留意しながら分析を進め、ウォーカーの宗教観も含めた新しい作品解釈を提示すると共に、作品が内包する現代的意義を論じていく。

「まえがき」においては、ウォーカーを軽視してきた批評家に対してポストモダンの解釈から警鐘を鳴らす、サディアス・M・デイヴィスなどの批評に言及しながら、ウォーカーの作品研究の新しい動向を指摘したうえで、本論文では、アメリカ南部から外へと広がるウォーカーの視座に沿って、四章からなる構成で分析を進めていくことを示した。

本論の第 1 章では、『グレンジ・コープランドの第三の人生』(*The Third Life of Grange Copeland*) と『メリディアン』(*Meridian*) の両作品に共通する「新しい奴隷制度」という暴力に着目し、両テキストをその連続性を念頭に四段階に分けて考察した。ま

ず第1節では、『グレンジ・コーブランドの第三の人生』の女性主人公メムから男性主人公グレンジに継承される暴力を超えた視点に、ウォーカーの「ウーマニスト」の原型を探ると共に、メムにはすでにその萌芽があるという、従来とは異なる論を展開した。第2節では、グレンジが孫娘ルスに伝えた自己責任の認識が非暴力への意志と深く結び付いていることに着目し、グレンジを人種主義の犠牲者とする多くの解釈に対して、意志に基づいた積極的生き方をした抵抗者という見解を示した。第3節では、『メリディアン』の女性主人公メリディアンが黒人母系の伝統の中に抵抗の真意を見出していく過程を分析し、「ウーマニズム」の深化を論じた。そして第4節においては、男性主人公トゥルーマンに黒人共同体再生の役割が与えられている意味を、1960年代半ばから1970年代の、アメリカの公民権運動終焉の時代背景に照らして考察したうえで、ウォーカーにとっての公民権運動が、「一つの命」を次世代へ渡すための、未来へ継続すべき非暴力による闘いであるという結論を導いた。

「女性のセクシュアリティを否定する家庭内暴力への挑戦」と題した第2章では、『カラーパープル』(*The Color Purple*)と『父のほほえみに照らされて』(*By the Light of My Father's Smile*)の両作品に描かれた、性差別主義に根差す黒人家庭内の暴力に着目し、両テキストの相互補完的性質から黒人男女の自己解放を四段階に分けて論じた。まず第1節では、女性の自己喪失と父権制への加担が密接に関わっている点を考察した。第2節では、父権制への抵抗を試みる時、女性同士の互いの痛みに対する共感が彼女達の自尊心の回復に重要な役割を果たしている点を検証した。続く第3節では、父権制の下で自己を喪失する男性が男性同士の間で痛みを共感し合うことで自己を回復するだけでなく、女性の痛みにも共感できる人間へと成長してゆく過程を分析し、そこに男女の苦しみを根源的に同一視するウォーカーのポストモダンの視点が示されていることに初めて着目した。さらに第4節では、こうした黒人男女の自己解放の背景に、一神教の神の絶対性を覆す、万物の存在をより平等に捉える汎宇宙論的概念があることを読み解き、そこに「非暴力思想」を基にした、人間の多様性を肯定するウォーカーの宗教観が現れていることを明らかにした。

第3章は、「FGM 廃絶へ向かって」と題し、『喜びの秘密をもつこと』(*Possessing the Secret of Joy*)を分析し、女性に精神的・肉体的に深いトラウマをもたらすFGMへの強い反対姿勢が貫かれていることを多角的に検証した。「はじめに」では、この作品

以前に FGM を扱ってきた作家の視点やその歴史的背景を概観しつつ、1970 年代後半以降のアフリカのフェミニストによる西洋フェミニズムへの反発から、多くの先行研究にはこの作品をウォーカーの西洋中心主義を示すものとして誤解している面があることを明らかにした。そのうえで、これまでは詳細に論じられてこなかった女性主人公タシの心の変化を主な登場人物との関わりの中で考察しながら、ウォーカーが目指した「普遍的自己アイデンティティ」について段階的に論じた。すなわち、まず第 1 節では、イギリスの植民地政策の中で自民族絶滅の危機に直面するとき、タシが FGM に「新しい」価値を見出している点に着目し、自ら民族的父権制の罫に嵌っていく背景には民族的ナショナリズムの不健全な高揚があることを示した。続く第 2 節では、タシのアメリカ人の夫、アダムが抱くキリストの人類救済思想は、キリスト教のドグマに根差した父権的価値観に縛られているが故に、タシを西洋父権制の犠牲にもしてしまっている点を考察した。また第 3 節では、タシのアメリカ人の友人オリヴィアもまた、人種主義的視点からタシの信頼を裏切る点を論じ、さらにこの分析において、オリヴィアの姿勢にウォーカーが従来の西洋フェミニストの間違いを重ねていることを、初めて明らかにした。第 4 節では、タシの自己回復がスイス人の医師ムゼーとの深い絆を通して達成される点を考察した。そして第 5 節では、ムゼーがタシの苦しみと一体化したときに会得した「普遍的自己アイデンティティ」を、さらにタシがアメリカの民主主義と関連付け、祖国の父権制に対する独自の抵抗に発展させていく点に注目し、タシのこの成長に基づき、第 6 節でタシが施術者の女性を殺害する行為を、一人のアフリカ人女性によるアフリカの次世代のための個人を超えた抵抗という、新たな解釈で読み解いた。この解釈は、ウォーカーが FGM 廃絶運動を、西洋とアフリカの人々が連帯し、共にあらゆる父権制から自己を解放するための闘いとして捉えていることを立証するものでもある。

第 4 章では、『わが愛しきものの神殿』(*The Temple of My Familiar*) と『今こそ心を開くとき』(*Now Is the Time to Open Your Heart*) を、そこに共通する帝国主義・植民地主義という観点から分析した。まず第 1 節では、『わが愛しきものの神殿』において、公民権運動以降の 1980 年代に自己喪失に陥っている二組の若い黒人夫婦が、彼らの親や先祖との絆を通し、帝国主義によって奪われた黒人の歴史を再認識しながら自己を回復していく過程を、先行研究を交えながら論じた。第 2 節では、これら四人

に流れる多様な人種の血が、人種間の亀裂を解決するために、「黒人の新しいアイデンティティ」として提示されていることを初めて明らかにした。第3節では、『今こそ心を開くとき』に『わが愛しきものの神殿』を発展させた壮年期の黒人男女の成長が描かれていることに着目し、多様な人々と「世界の苦しみ」を彼らが共有する姿を、エドワード・W・サイードの帝国主義に関する定義を援用しながら分析した。さらに第4節においては、『今こそ心を開くとき』で、先祖の黒人奴隷に向き合う黒人女性主人公が自身に流れる「白人の血」の意味を追究する姿に、黒人対白人という二項対立的思考を超えたウォーカーの新しい歴史観と、彼女が「黒人の新しいアイデンティティ」に託す黒人の使命感を見て取った。さらに、こうした見解には、黒人の解放に止まらず、全ての人々の解放と暴力の無い未来を目指す、作家ウォーカーの挑戦が込められていると論じた。

最後に、「あとがき」では、本論文の分析を、ペンで闘うというウォーカーの姿勢から捉え直し、先行研究で一面的にしか論じられてこなかった、彼女の「全てのものとの一体 (oneness)」の真意を、「ウーマニスト」の定義と「非暴力思想」との総合から考察した。そのうえで、ウォーカー作品は、文化や宗教が互いにせめぎ合う現代のグローバル社会において、世界の人々が連帯するための先見的指針に基づく創作として高く評価されるべきであることを示した。